

郷土讃岐の遺産

伊達伍

1 国庁跡

ペテイオニーデの城山：せせらぎの綾川：それにふちどられた緑の丘と段丘状に耕された畑、そこに府中本村のたたずまいがある。

現在、鉄道と広い国道に沿いながらも、どこかに牧歌的ないなかの素朴さを感じさせる風情である。しかし山河襟帯の地というが、ここは王朝のその昔、讃岐一国の国府が置かれていた。

崇徳院の行宮跡・鼓ヶ丘・その緑の丘を今の国道との間には「内間」「垣の内」などと古くから呼ばれた地名があつて、国府庁はおそらく、この界わいだらうと推定されていた。

大正十一年、時の村長、藤井亀三郎氏が首唱となつてその「垣の内」に建てたのが、今の讃岐国庁跡碑である。塚のように築いた敷地は二、三十坪もあろう、鼓ヶ丘の吉川さん所有の田の中に立っている。

なにぶん、以前からこのあたりに風変りな小地名が残っていたのであやしかった。

「垣の内」はもちろん、「正倉」「印やく」「聖堂」「按台」「帳継」「状継」などというのがそれで、これらは確かに国府のあつた土地柄を暗示していた。

数ある全国の国府跡の内この讃岐の府中ほど関連性の地名をたくさん残しているのはまれなのだ。

そのうえ、あたりに散乱した古瓦の出土品も多い。これがまた証拠立てになった。不思議なことに浄土真宗の盛んな土地柄ながら、今までに寺は一か寺なかった府中である。

それに「本坊」とか「南坊」という地名「西福寺」「弘法寺」「開法寺」などはつきりした寺名も残って、王朝の昔国府跡らしく仏教文化の栄えたことをしの

ばせている。

しかし、これらは既に中世期に廃寺となつたらしく、その跡はみな里のため池にかわつてしまつてゐる。

菅原道真が、「暁にきく開法寺の鐘……」と漢詩に詠じた開法寺……それが今の開法寺池になつて、いたずらに鼓ヶ丘の緑をうつすばかりだ。

「府中」は讃岐に限らず、類例の多い国庁跡の地名である。そして、同時に、当時は駅路の中心でもあつた。

綾川をはさんだ新宮寄りに「石井」という地がある。そこに「堺石」「京の石」「国分石」と呼ばれた古い碑石がたつていて、その昔この石碑が讃岐の中央点を標示していたというのだ。

府中の「石井」を中心に道路は当時西の方、額坂越しに柞田駅（観音寺）……東は刈田駅（引田）へ通じていた。ここはその古い駅馬の遺跡跡でもある。この駅を「河内駅」あるいは「甲知駅」といつて府中の別名にもなつていた。

国府の地を「コウチ」と呼ぶのは他国の例にもあるから、おそらく「国府地」の意味からの呼称であろう。